授業づくりをこうマネジメントする（第９回）

２ 表現活動こそがプラスの生徒指導

中嶋　奇遇ですね。僕も中２の学年主任をしていたとき，学年全体で「ウエストサイド・ストーリー」をやったんですよ。役者だけでなく，監督，音響，大道具，脚本などすべて生徒がやりとげました。**創造性**が発揮できる場面を与えると**協同学習**が始まります。**みんなのために頑張れる学年，みんなで１つの作品を作る喜びを知っている学年は最後まで荒れない**ですね。

吉田　そう思います。活動や発表の場を与えることで，子どもたちは互いに刺激し合って認め合い，高め合っていきます。私は異動するたびに挫折を感じ，それを乗り越えようとしてきましたが，根底にはいつも同じ思いがありました。それは，子どもたちはもともと「**表現したいという願い**」「**新しく作り出す力**」「**仲間同士で教え合う力**」をもっているということです。それを発揮する場面をきちんと用意してやり，それを最後まで見届けてやると，子どもたちが前向きになります。**荒れを克服するのは力の生徒指導ではなく，子どもたちの「心情」を揺さぶり，中にあるエネルギーを外に表出させてやること**ではないかと考えています。それは，まさに先ほど言われた「**感動体験を憧れにつなげ，誇りを育てる**」というプロセスだと思います。

中嶋　私も，同じように生徒会顧問を長年担当してきましたが，子どもたちの**感受性の豊かさ，行動力**には圧倒されました。**教師が教える以上に子どもたちから学ぶことのほうが多かった**ですね。

吉田　学校が荒れていたときは，**力の生徒指導が横行**し，教師の**説明や指示**がやたらと**多く**，行事も事前に教師の方で**レールが敷かれて**いることが多かったように思います。子どもたちは**やらされている**という思いから，**閉塞感やストレス**が溜まっていたようです。しかし，これではいけないと教師集団が何度も話し合い，何かをするときは子どもたちの考えも取り入れるようにしました。**参画させて明確な目標**をもたせ，**自由度**を高めたことで，彼らがやる気になったのだと思います。時々，卒業生から手紙をもらうのですが，学校やダンスで頑張ったことがその後の人生にも生かされていることを聞くと嬉しくなりますね。（本誌 p.132へ）

ダンス１期生たちと